

# 王寺の里観光案内の手引き

王寺町の人口 **23,020人** (25年3月末)

王寺町花 **さつき** 王寺町木 **梅** 面積 **7,0km<sup>2</sup>**

## 久度神社・龍田大社から孝霊天皇陵・芦田池 案内ポイント

### ○久度商店街

明治23年(1890年)に奈良―王寺間に県内最初の鉄道(大阪鉄道)が開通するまでは、37戸の小集落の農村地帯だった。鉄道網が整備され、駅前を中心に商店街が出来、信貴山への参詣道として、また、鉄道の町としてカフェ・劇場・映画館等で大いに賑わった。しかし、次第にベッドタウン化して大型商業施設が増えると共に衰退していった。

### ○久度神社

創期は奈良朝以前といわれ、祭神は品陀和気命(ほむだわけのみこと)誉田和気命である。『続日本紀』に「延暦2年(783年)平群郡20座に列せられた」とあり、『延喜式神名帳』にも載っている古社である。久度神は御厨神の総称であり、「火の神」「窖かまどの神」と言われている。ほかに八幡(寿命・幸福の神)、住吉(水運・交通の神)、春日(子孫繁栄の神)の神を祀る。暦王3年(1340年)銘を持つ石灯笼や文明8年(1476年)の箱書のある「春日曼荼羅」を所蔵している。

### ○大和川河川敷

北に生駒山、信貴山、東に矢田丘陵、西に明神山、南に片岡山が眺望できる。河川敷は、日々のジョギングやウォーキングなど広く利用され、冬場は、がん、カモ類の渡り鳥が数多く飛来してくる。

### ○多聞橋

木橋⇒石橋⇒コンクリート潜水橋⇒鋼橋と変遷しつつ、信貴山への参詣や王寺、三郷の往来に役立ってきた。

### ○多聞地藏

古来、当地より信貴山への参拝が多く、道中安全を祈り建てられた。花崗岩製の半肉彫りの地藏菩薩像(弘化3年1846年記銘)は、両手を胸前で組み宝珠を持つ。

### ○松永久秀の墓と供養塔

- ① 墓―奈良県北葛城郡王寺町本町の片岡山達磨寺
- ② 供養塔―奈良県生駒郡三郷町立野北

二度も織田信長に反逆した戦国武将・松永久秀だが、天正5年(1577年)10月10日 信貴山城にて爆死する。

### ○龍田大社

祭神は天御柱命(あめのみはしらのみこと)、国御柱命(くにのみはしらのみこと)、別名は志那都比古神、志那都比売神で、二神はそれぞれ「天地自然を支える風の霊」「風を司る」神である。『日本書紀』に「天武天皇4年(675年)4月4日に勅使を遣わして風の神を龍田の立野に祠らしむ」の記事が初見である。

また、『延喜式』の龍田風神祭の祝詞には、数年続きの五穀不作がありト事を行うと、龍田に宮を祀るならば五穀を豊かにするとの託宣があったとある。毎年7月第一日曜に行われる「風鎮大祭」は、天武天皇の時代に始まると伝えられる由緒ある祭で、五穀豊穰を祈り、特に暴風洪水が起こらないことを祈願する。『日本書紀』によると天武天皇は19回、持統天皇は16回遣使奉幣している。

## ○孝霊天皇片岡馬坂陵

王寺町唯一の天皇陵である。孝霊天皇は、孝安天皇の第2皇子で『古事記』『日本書紀』に記される第7代天皇である。奈良県磯城郡田原本町の黒田廬戸宮で崩御され、この地に葬られたとされる。また孝霊天皇の子で倭迹迹日百襲媛命（やまとととひももそひめのみこと）の同母兄弟の彦五十狭芹彦命（ひこいさせりひこのみこと吉備津彦命）は桃太郎伝説のモデルと言われている。

## ○親殿神社

片岡道春が春日若宮から祭神を勧請して「親殿」と名づけ、片岡武士団が戦勝祈願や軍議をする場所であった。拝殿には、戦勝にまつわる絵馬が数多く奉納されている。

## ○芦田池

昔から「葦田」と呼ばれ、葦が茂っていたことから『放光寺古今縁起』には葦田池と書かれている。「あしたの原」は、葛城山から馬見丘陵にはさまれた葛下川流域一帯をさすと思われ、数々の和歌が残されている。

## 達磨寺から片岡神社・放光寺～和の鐘 案内ポイント

### ○達磨寺

達磨寺は、13世紀前半に勝月上人が達磨大師の墓であると伝えられていた古墳の上に三重塔を建立して開基されたと考えられている。その後東大寺や興福寺などの弾圧や松永久秀の戦火によって荒廃したが、そのたびに復興をとげた。特に室町幕府の保護のもと大規模な復興がなされた。

慶長7年(1602年)の徳川家康朱印状は、家康が達磨寺に寺領30石と境内竹林を寄付することを記したものである。以来、達磨寺は門前村を領地として支配するようになった。15代将軍のうち12通の朱印状が現存している。

永享2年(1430年)に樅井法眼集慶が彫った本尊の木造達磨坐像、建治3年(1277年)に院恵・院道が造立した木造彩色聖徳太子坐像、寺宝の絹本着色涅槃図、文安5年(1448年)在銘の中興記石幢は、ともに重要文化財に指定されている。

### 聖徳太子と飢人伝説

『日本書紀』推古天皇21年(613年)の条をはじめとする諸書によると、聖徳太子（厩戸皇子）が斑鳩から磯長谷へ向かう途中、片岡山を通りかかったところ、瀕死の飢人に出会った。太子はその飢人に寒さと飢えをしのぐための食物と自分の衣類とを与えた。後日、使者をやって飢人の様子を見に行かせたところ、すでに息絶えていたので丁重に葬った。それから数日後に墓の様子を見に行かせると、屍骸は消え衣服だけがたたまれて、棺の上に置かれていた。太子はその飢人が真人であったことを悟るというストーリーである。後世、この真人こそが達磨大師であるという説が起きて達磨寺の由来になった。

### 達磨寺古墳群

「飢人伝説」と結びついた古墳は、達磨寺本堂の下(3号墳)にあり、片岡飢人の墓だという伝承がある。本堂の北東(1号墳・2号墳)を含め、小規模な3基の古墳は6世紀末ごろに造られた古墳で、内部に横穴式石室があり、達磨寺古墳群と呼ばれている。

本堂の東北隅にある古墳(1号墳)は復元すると径15m、高さ4m以上の円墳で、東に開口する全長約6mの両袖の横穴式石室をもっており、石室の見学も可能である。

## 雪丸像

聖徳太子が飼っていた雪丸という名の愛犬を象ったとされる石像で、もとは本堂の鬼門つまり東北に祀られていた。それは、雪丸自身が臨終のさい、「死ねば本堂の東北隅に葬ってほしい」と話したからだといひ、雪丸は言葉を話せ、お経も唱えることができたと言われている。

雪丸が死んだあと、聖徳太子が自ら石工に命じて雪丸像をつくらせたといひ、1月1日に雪丸が鳴けばその年は豊作になるという言い伝えがある。

## 薬師石

目を閉じて近寄り、両手で石を抱くことが出来れば病気が全快するという、靈験あらたかな石である。

## 松永久秀の墓

達磨寺の寺記によると、信貴山城が信長軍により落城し久秀が自害したさい、筒井順慶が達磨寺に埋葬したとある。

## 達磨寺方丈

松永久秀により焼き払われ衰微していた達磨寺であったが、豊臣秀頼の命を受けた片桐且元により、禅宗寺院の塔頭の方丈形式を残して再興され、現在では奈良県の重要文化財に指定されている。亀集庭という石庭も名園である。

## ○放光寺（片岡王寺）

現在の放光寺は、片岡王寺といわれた古代寺院の跡に建つ黄檗宗の寺院で、延宝8年(1680年)に再興され、十一面観音坐像を本尊としている。

『放光寺古今縁起』によれば「敏達天皇第3皇女の片岡姫が葛下郡片岡中山に営んだ片岡宮を寺に改め、片岡寺と称したことにはじまり、聖徳太子をはじめ用明・推古・舒明・孝徳・聖武天皇らの崇敬を得て、皇寺（王寺）と称された」とある。この片岡王寺が、王寺町の町名の起源と考えられている。

ただ、敏達天皇皇女の片岡姫の名は『古事記』『日本書紀』には見えず、その実在は定かでない。片岡王寺の伽藍は永承元年（1046年）の雷火による焼失を契機に衰退したが、その遺跡は現在の王寺小学校を中心とする位置に存在し、南向きの四天王寺式伽藍配置であったことが判明している。また、基壇跡も明治時代までは残っていた記録がある。

## ○片岡神社

『延喜式』の葛下郡十八座「片岡坐神社」に比定される式内社である。記録によると正暦5年（994年）疫病や天変地異が続いたため、中臣氏人が救済を祈願して奉納したとある。八幡大神、住吉大神、豊受大神、清滝大神、天照大神が祀られ、放光寺の鎮守社である。現在は金計、大原、住吉の3社をも片岡神社に合祀し本殿西側の小祠に祀られている。境内には、羽根つきに使われるムクロジの大木がある。

## ○和の鐘

平成元年(1988年)、ふるさと創生事業として現在の「和の鐘」が建設された。この名称は、聖徳太子の『十七条憲法』の「以和為貴」の精神に由来しており、昭和40年(1965年)には町民憲章に記載されるとともに町歌にも歌われるようになった。

## ○みちびきの像

昭和31年(1956年)、登校途中の小学生の列にトラックが突っ込み、下級生をかばおうとした上級生と下級生あわせて2人の尊い命を奪うという惨事があり、二度と悲惨な事故を起こさないでほしいという願いを込めて、交通安全のシンボルとして建立された。今の像は平成6年(1994年)に再建されたものである。